

プロローグ PROLOGUE

二人きりの更衣室で、少年と少女が見つめ合う。

張り詰めた空気。少年の背中を流れる滝の冷や汗。

その少女——南条姫沙なんじょうきさの裸身は、恐ろしくも美しかった。

純白の素肌はきめが細かく、見るだけでなめらかさを感じさせる。
細い腰と鎖骨には健全な色気が漂い、優雅な曲線美を描いている。

しなやかな指は、制服のスカートを今にも下ろそうとしていた。

「きゃ——」

「待て待て待て待て！」

叫ぼうする姫沙に、北御門帝きたみかどみかどは大慌てでストップをかけた。

「……待て？ 北御門さんが私に命令する権利なんてあるのかしら？ 女子更衣室に乱入して乙女の裸を覗いたばかりか、写真まで撮ろうとしている北御門さん？」

言われて初めて、帝は自分がスマートフォンを姫沙に向けていることを思い出した。急いでスマートフォンをポケットに突っ込む。

「これは違う！俺は今日のスケジュールをスマホでチェックしながら、男子更衣室に入つたつもりだったんだ！」

姫沙が帝を睨みつける。

「便利な言い訳ね。飽くまで間違つて女子更衣室に入つたと思わせたいのね」

「間違つてなどいない！俺は確かに男子更衣室に入つたはずだ！ここには何度も来ているから絶対に……」

帝は部屋のプレートを確認するため廊下に出ようとする。

「そこから動いたら、叫ぶわ。百デシベルで」

「百デシベルで!？」

それは大型ジェット機の騒音に匹敵した。

帝の足が固まる。

「……一瞬だけ、確認させてくれ」

「ノー。叫ばれたくなければ、私の言うことを聞きなさい」

「くっ……」

圧倒的に男が劣勢となる状況。

帝は奥歯を噛んだ。

「わけが分からん……。なぜお前は余裕なんだ？裸を見られてショックじゃないのか？」

姫沙は肩をすくめた。

「その辺はもちろん相手によるわ」

「相手による……？俺はいいのか？」

帝が尋ねると、姫沙の顔が真っ赤に染まる。

「は、はあ!? どうしてそんな結論になるのかしら!? あり得ないわ！ 自意識過剰じゃないのかしら!? どれだけ自分に自信があるのかしら!？」

「いや……俺が悪かった」

ちよつと期待してしまつた帝だが、すぐに失言を悔やむ。

ここまで全身全霊で否定されたら、凡庸な男子の精神なら崩壊しているところである。

姫沙は誇らしげに人差し指を振る。

「私が余裕なのはね……、すべてを私が仕組んだからよ！ あなたは間違つてなどいない……私はあなたを陥れるため、男子更衣室で着替えをしていたの！」

「痴女じゃねえか！」

「痴女ではないわ！私は全人類に着替えを見せようとしていたわけではないから。北御門帝、あなただけをハメるため、他の男は更衣室の周りから排除していたのよ！」

「俺だけに裸を見せたかった……だと……？」

「その言い方はやめてくれないかしら!？」

語気を荒らげる姫沙。

確かに帝がここに来るまでのあいだ、廊下の人通りは妙に少なかった。

どうやってそんな状況を作り出したのかは不明だが、南条姫沙なら可能だろう。

南条家の本質はフィクサーであり、日本の闇社会を陰謀で牛耳ってきた血筋なのである。

「さあ、分かったら、静かにドアの鍵を閉めなさい。誰にも邪魔をされたくないから」

姫沙は居丈高に命じる。

世界が自らに服従するのが当然と思っているような、女王の貫禄。

「そうすると俺と密室で二人きりになるわけだが……いいのか？」

「え……いい、いいって、なにが？」

姫沙は戸惑った。

「俺がお前を押し倒して無理やり黙らせるとか、なんかそういう心配はしないのか？」

「そ、それはそれで……」

「それはそれで……？」

帝は眉を寄せた。

姫沙は慌てて手を振る。

「な、なんでもないわっ！ なんにも言っていない！」

「いや、今なにか言いかけたよな？」

しかも結構大事なことを耳にしたような気がする帝である。

「言っていないわ！ 私、北御門さんがそういうことしないって知ってるから。裸を見られても大丈夫だってぐらい信用しているから」

「そ、そうか……、それはすごい信用のされ方だな……」

「そ、そうよ……、ありがたく思いなさい……」

真っ赤な顔で立ち尽くす姫沙と、高熱に苛まれる帝。

「だが俺はお前を信用していないので逃げる！」

「だめーっ！」

更衣室から駆け出そうとする帝の腕に、後ろから姫沙が飛びついた。

腕に当たる、少女の感触。涼やかで甘酸っぱい香り。

彼女の吐息までもが間近に感じられ、帝は今度こそ全身を凍りつかせる。

「逃がさないから……話が済むまでここから出さないから……」

「明らかに面倒な話の予感がするんだが……、今日のことはなかったことに……」

「ならないわ！ し、しがみついているの恥ずかしいんだから、もう諦めて！」

本当に恥ずかしそうな声だった。

「諦めなければ、ずっとしがみついているというわけか」

「馬鹿なこと考えないで！」

しかしその選択肢もありかもしれないと帝は思ってしまう。下着姿の南条姫沙にしがみつかるなど、この先の人生で二度と味わえない体験なのだ。

「と、とにかくこっちにきて！ 逃げたら本当に叫ぶから！」

「あ、ああ……」

帝はドアを離れ、警戒しながら姫沙と共に更衣室の奥へと移動する。

姫沙はぎこちなく腕組みした。

「……さてさて、困ったわね、北御門さん。たとえ男子更衣室であろうと、あなたが女子の着替えを覗いたのは事実……あなたは有罪よ！」

「そうか!？」

「そうよ。だって写真では、男子更衣室も女子更衣室も見分けがつかないのだから……」

「写真……?」

帝ははっとして辺りを見回す。

その鋭敏な視力が、更衣室の違和感を瞬時に察知した。

全方位に……カメラが仕掛けられている。ロッカーの陰、天井、床の隙間、カーテンの向こう、あらゆる角度から、まがまが禍々しいレンズが帝に向けられている。

姫沙は口元に指を添え、忍び笑いを漏らした。

「あなたが着替えを覗いている証拠写真は、南条家のサーバに送信済み……私に万一のことが



あれば、全世界に公開されるわ。そうだったら、あなたの輝かしいキャリアはどうなるかしら……？ 日本の未来を背負って立つ、北御門帝さん？」

「……ッ！」

帝の噛み締めた唇から血が噴き出した。

北御門家は、明治から続く名家。

多数の首相を輩出し、南条家とは逆に日本の光を担ってきた一族である。

帝は生まれてから、完璧に品行方正、誰にも恥じるところのない王道を歩んできた。その帝にとって、これは信じられないほどのスキヤンダル。

一門のご先祖様に申し訳が立たない。

今すぐ腹を切れと言われたら切るしかない、そんな一生の不覚だった。

「なにが……目的だ……。金か……？」

帝は拳を固めた。

姫沙は整った鼻先で笑う。

「お金？ そんなもの欲しくないわ。南条家の資産があれば、国だって買えるし」

「だったら、なんだ。俺の命か」

「殺さないわよ！ あなたには、私とのゲームに付き合ってほしいの」

「テレビゲームか、カードゲームか……」

「どちらでもないわ」

「FXはやらんぞ」

「マネーゲームでもないわ……恋愛ゲームよ」

「恋愛ゲーム……？」

馴染みのないタイプのゲームだった。

北御門一族に生まれ、幼少期より恋愛禁止の掟に従っていた帝。当然のごとく、恋愛要素の大きな漫画も映画も禁止されている。

クラスメイトの男子がスマートフォンなどで恋愛ゲームを遊んでいるのを見かけたことはあるが、詳しくは知らない。

「それも、ただの恋愛ゲームじゃないわ。フィールドは現実、プレイヤーは二人だけ」

「……俺とお前か」

「そう。私とあなたのどちらかが相手を惚れ込ませることができたら、惚れた方は一族を捨て、奴隷として相手のモノになる……そういう、お互いの人生をベットした恋愛ゲームよ」

今にも体が触れそうな距離で、姫沙がささやく。

その顔立ちには日本人離れして彫りが深く、鼻筋はつんと澄まっていた。

鋭智の輝きが満ちた瞳は、視線を離すことができないほどの目力に溢れている。

口紅を塗っていないのに、その唇は血よりも紅い。

「北御門家を……潰すつもりか……」

帝が尋ねると、姫沙は肩をすくめた。

「さあ？ ゲームに応じれば、私はあなたのスキャンダルを闇に葬るわ。ここですべてのキャリアが終わるよりは、良い選択だと思うけど。どうかしら？」

「一秒待て」

帝は頭脳をフル回転させる。

要するに、姫沙が提案しているのは心理戦だ。

ベットされる賭け金は巨大だが、勝てばいいだけのこと。姫沙は手段を選ばず攻撃してくるだろうが、帝は自分が敗北しないと知っている。

いや、名門・北御門の人間にとって、敗北など許されないのだ。一女子高生の策略に屈するようでは、魍魎魍魎の森々く政界で生き抜けない。

「……『惚れ込んだ』を判定する基準が要る。相手に好意を表現したら負け、というルールはどうだ」

それなら、帝は絶対に口にしない自信がある。

「妥当ね。お互いの言葉が好意の表現に当てはまるかは、話し合って決めるということで。正義の味方の北御門家が、屁理屈で誤魔化したりはしないわよね？」

「当然だ。南条家は屁理屈をこねるかもしれないが」

「失礼ね。闇にもルールは必要なのよ？ そうじゃないと秩序が崩壊するわ」

「じゃあ、その条件で……」

「もう一つ」

言いかける帝を姫沙がさえる。

「自分から相手を求めた場合も、負けということにしましょう」

「求める……というのは……？」

「決まってるでしょう、そんなこと」

「今度どこかで会おう」とか誘ったら負け、ということか？」

帝は首を傾げた。

「違うわ。ほ、ほら、あれよ……求めるって言ったら、あれしかないでしょう？」
心なしか焦ったような口調。

「悪いが、分かん。ルールをはっきりさせておかないと、ゲームは始められない。追加した条件はなんだ？」

帝が真剣に尋ねると、姫沙の白い頬が染まっていく。

姫沙は手を握り締め、帝を睨み据える。

「だ、だから……、え、えっちなこと、したいとか相手を求めたら負け、というルールよ」「性交か!？」

「あなたは大声でなにを言うの!？」
顔を真っ赤にする姫沙。

「いや……すまん。あんまり驚いたもので……。キスもか」

「当たり前でしょ! 私、キスなんてしたことないし!」

「俺が求めたらファーストキスになってしまいうわけか……」

「そうよ! だから貴重なのよ!」

帝を睨みつけて主張する。

これほど美しい少女、それも南条一族の後継者とあれば、初めての価値は無限だろう。

「触らせてくれ、とかも駄目なのか?」

「内容によるわ。応急手当などで触れるのは可」

契約事項は最初にはつきりさせておくのが基本なので、帝は質問を続ける。

「どういう触り方が駄目なんだ? どの辺までは触っていいんだ?」

「え、ええと……、手とか、頭ぐらいなら……」

「手を繋ぐとか、頭を撫でるとかはOKと?」

「そ、それは、こ、恋人っぽいから……」

姫沙は恥ずかしそうにそっぽを向く。

「確かにアウトだな……」

「き、北御門さんはしてみたいの……?」
上目遣いで尋ねてくる。

「いや……」

してみたくて仕方ない帝だった。

正直、頭を撫でたら姫沙がどんな顔をするのか見てみたかった。

「あー、ええと、それじゃ、恋人っぽくなければ、どこを触っても大丈夫なのか?」

「その質問はセクハラよね!」

姫沙は涙目だった。

「すまない」

帝は体温の上昇を確認した。羞恥である。

「そして、勝者は敗者に求められたら、その好意に無条件で応えなければならない……そういうルールでどうかしら?」

「無条件……だと……?」

それはすなわち、負ければ奴隷になる代わり、南条姫沙の美しすぎる肢体に溺れることができるということである。

光を担う北御門の人間として、帝は決して闇の南条一族に負けられないのだが。色香に惑わされるわけにはいかないのだが。

思わず、喉がごとりと鳴る。

南条姫沙がささやく。

「どう、北御門さん？ 私とこのゲーム、戦ってみたい？」

北御門帝は重々しくうなずく。

「……いいだろう。奴隷になるのはお前の方がな」

「すごい自信ね。一ヶ月後は私にひざまずいて愛を懇願する運命なのに」

「そんな運命は知らんな。俺の足下でひざまずくのは、南条、お前だ」

睨み合う二人。

「後で条件を誤魔化されないよう、誓約書を作っておこう」

「ええ。お互いの血で判を押ししよう……」

帝と姫沙は手近な台で、悪魔の契約書を作り上げる。

メモ帳を破つただけの無造作な紙に、条項を書き付け、名を記し、拇印を押す。

二枚を完成させると、折り畳んで学生手帳にしまい込んだ。

「さあ、もう後戻りはできないわよ」

姫沙は妖しく目を細めた。

「知っているさ。お前も南条一族も、これで終わりだ」

帝は口角をつり上げる。

「ふふふふふ……」

「くくくくく……」

二人のあいだで火花が飛び散り、不敵な笑い声が響く。

南北の覇権、そして互いの未来を賭けた恋愛ゲームが、火蓋を切った瞬間だった。

帝が廊下を去っていくのを見届け、姫沙は契約書の入った学生手帳を胸に抱き締めた。

「やった！ やったわー」

思わず、感情を抑えきれずにその場で小躍りしてしまう。

狙い通り、帝を恋愛ゲームに引っ張り込むことができた。

そのために、着替えを覗かせるなんて恥ずかしい思いまでしたのだ。

それだけではない。

腕利きのエステティシャンを呼んでの、徹底的なお肌のケア。

帝が好きになってくれそうな、最高に可愛い下着のオーダーメイド。

有象無象の男子を排除する、廊下に仕掛けた人払いのトラップ。

その他諸々の計画を含めたら、実行まで二ヶ月はかかっている。

いや、帝の通う着世学園への転校を決めたときから数えれば、さらに長い。

けれど、やっと……スタート地点に立てた。
 あとは帝を全力で自分に惚れ込ませるだけ。身も心も奴隷にするだけ。
 そうしたら、夢みたくない日々が待っている。
 「ぜったい……ぜったい……あなたを手に入れるから……!!」
 スマートフォンに映った帝の写真を見つめ、姫沙はささやいた。

第一章

南北戦争

Do you like to be captured by a cute girl?

「……良い朝だ」

みかど 帝はベッドで目を開いた。

きたみかど 北御門一族の朝は、午前五時ジャストに始まる。

そこには一秒の誤差もない。

物心ついてから高校二年の今日に至るまで、北御門帝は決して目覚まし時計を使ったことがなかった。

言うなれば、帝こそが目覚まし。

高校二年生の、目覚まし時計なのである。

今日も覚醒と同時に起き上がり、素早く身だしなみを整える。

帝の寝室には、勉強部屋、バスルーム、手洗い場、トイレなどが一セット並び、廊下とは完全に遮断されている。

そのすべてが帝の専用。

弱みを他者に見せない北御門家では、たとえ使用人にだろうと寝顔を見られるのは言語道断。

日記やボエムなどの機密文書があるプライベート空間は、親さえ立ち入り禁止だ。日本で五指に入る資産家の後継者でありながらも、帝は自ら着替え、顔を洗い、髪をとかし、とっくりと鏡を観察すると。

「よし。完璧だ」

身だしなみに満足した。

決して失敗を許さない、厳しい目鼻立ち。

強い意志を示して結ばれた唇。

不摂生を拒絶し、引き締まった長身。

装飾や退廃を望まない黒髪。

どこに出ても恥ずかしくない、北御門家の男児である。

帝は部屋で、扉に手の平を押し当てた。

「出る」

『指紋認証、声紋認証、虹彩認証、オールクリア。北御門帝様、おはようございます。ゲートを開放いたします』

電子音声と共に扉が開く。

帝は廊下に進み出た。

百年以上の歴史を誇る、北御門本家の屋敷。その廊下は、時代と古木の薫りに満ちている。

大きな窓から爽やかな朝陽が降り注ぎ、帝の意識をさらに覚醒させる。

無数の部屋が並ぶ屋敷のあちこちでは、既に召使いたちが朝の仕事を始めていた。帝の姿を見かけると、作業の手を止めて深々と礼をしてくる。

帝は召使いたちに会釈しながら廊下を歩き、広々とした食堂に入った。

大きなテーブルには、既に両親がついている。

「おはよう、帝」

いかめしい顔つきで鎮座する男は、北御門家の当主。

家の外では、与党の幹事長を務めている。彼に悪と断罪されれば、二度と政界で這い上がれない。そう言われるほどの絶大な権力者だ。

「よく眠れましたか、帝さん」

当主の向かいで微笑む女は、北御門家の奥方。現首相の実姉だ。水も漏らさぬ正論で政敵を追い詰め、多くの首相を退陣に追いやった政治家でもある。

「おはよう、父さん、母さん」

ある種の怪物両親の前に、帝は席についた。

召使いたちがテーブルの料理から蓋を取りのけ、朝食の準備が整う。

並んでいるのは、野菜や玄米、海草類、魚を用いた、伝統的な和食の数々。過ぎた美食を戒める北御門家だが、素材は最高級のものを取り寄せている。

「では、復唱を」

当主が言い渡すと、奥方と帝がうなずく。

「品行方正、尻尾は掴んでも掴ませるな」

「品行方正、尻尾は掴んでも掴ませるな」

「品行方正、尻尾は掴んでも掴ませるな」

厳肅な空気の中、北御門家の家訓が繰り返される。

これこそが、北御門家の最大にして絶対の掟だった。

お経のような唱和を済ませ、朝食の時間が始まる。

当主は玄米を五十回きっちり噛み締め、緑茶をすすると、帝に尋ねた。

「どうだ、帝。学校の方は万事上手く行っているか？」

帝は小さく笑う。

「もちろん完璧だ。どの教科の成績もトップクラス、教師たちとの関係も良好、卒業後の政治に必要な人脈も着実に築いている」

「それはなによりだ。人心掌握こそが政治の要だからな。しかし、女との関係をあまり深めてはならんぞ。色恋は最大の弱点になる。北御門の人間は古来、恋愛禁止だ」

当主の言葉に、奥方が言い添える。

「帝さんには許嫁がいるのですからね。あなたが日本を治める上で最高の支え手となる人材

を選びすぐっているのです。一時の熱病に惑わされる必要はありません」

当主は眉を寄せる。

「そういうことだ。色恋はスキヤンダル元、害悪の種。日本の光は誰にも尻尾を掴まれるわけにはいかん。スキヤンダルになるようなことは、決してないだろうな？」

「……当然だ！」

帝は生まれて初めて嘘をついた。

その良心の呵責は、常人の数百倍。極度のストレスによって胃の内臓が損傷し、口から血が噴き出す。帝はすかさず湯飲みで血をキャッチし、両親の視界から隠した。

「特に、南条家に弱みを握られることだけは、絶対にあってはならんぞ」

当主が言い含め、奥方が顔をしかめる。

「そうそう、南条の娘と来たら、ずいぶんと美しく育っているようではありませんか。気を抜いて誘惑されてはなりませんよ、帝さん」

「はは……誘惑などされるわけが……」

帝は頬を引きつらせた。先日見たばかりの下着姿が脳裏にくっきりと残っていた。

当主が硬い口調で諭す。

「古くから、北御門家は世の光として日本を導き、南条家は謀略の限りを尽くして闇を操ってきた。両家のあいだで流された血は数知れない。かの関ヶ原の戦いも、事実上、北御門派と

南条派の勢力争いだった。もし北御門が敗北するようなことがあれば、そのときは……」

「……日本が闇に包まれる。よく分かっているよ、父さん」

北御門帝は南条姫沙に負けることが許されない。帝が恋愛ゲームで姫沙に勝てば、長く続いた南北戦争に終止符が打たれる。南条家は北御門家の軍門に降り、日本は未来永劫、栄光に満ちあふれるだろう。

奥方が鼻に皺を寄せる。

「なぜ南条の娘が帝さんの高校に入ってきたかは分かりませんが……、邪悪な目的あつてのことでしょう。私としては、同じ学校に通わせておきたくないのですが……」

「そう言うな。帝にとつても、将来の敵を今のうちに知っておくのは役に立つ。まだ南条の娘も未熟だろうし、悪の権化に育つ前なら安全……予防注射のようなものだ」

当主は豪快に笑った。

その予防注射は強烈すぎたぞ、と帝は内心でつぶやく。

昨日なんて、危うく予防注射だけで即死しそうになったのだ。まさか姫沙が体を張ってまで帝を潰そうとしてくるとは予想もしていなかった。

——まあ、昨日は不意を突かれただけだ。今は警戒しているから違う。

北御門家の使命、そして南条家との確執については、誰よりも承知している。

帝は凜と背を張り伸ばすと、両親を真っ直ぐに見据えた。

「心配は無用だ。俺に限って、敗北もスキヤンダルもあり得ない。絶対に」

「ふふ、それでこそ北御門の後継者ですよ、帝さん」

「はっはっはっ、頼もしい正義の童貞だ」

両親は頬を緩め、信頼の眼差しを息子に注ぐ。

二人の期待を裏切らないためにも、必ずや姫沙に勝たねばならない。

そう決意を新たにす帝だった。

蒼世学園の二年A組の教室で、帝は迎撃態勢に入った。

敵——南条姫沙が、登校したばかりの帝に接近してくる。

彼女はいつものごとく朝から完璧に髪型を整え、制服には皺の一つもない。朝陽に輝く美しい顔立ちに、可憐な立ち姿。しかしその瞳は、捕食獣のように帝を睨んでいる。

クラスメイトは誰も彼女の不穏なオーラに気づかず、普通に挨拶を交わしているが……。

節穴である。

南条姫沙の全身に、帝は暗殺者の気迫しか感じない。パーフェクトな服装も容姿も、そういう武装にしか思えない。

姫沙が帝の机の前に立ち、にっこりと笑う。

「おはよう、北御門さん」

帝は椅子に座ったまま、沈黙でもって姫沙を見据える。これからどんな攻撃を仕掛けてくるのか、あらゆる神経と筋肉を張り詰めさせて身構えていた。

「北御門さんってば。そんなに怖がらなくていいじゃない」

「警戒しているだけだ」

「警戒しなくてもいいのよ？ 同じクラスの仲間なんだし」

「お前を仲間だと思ったことは一度もない」

クラスメイトである以前に、南条家と北御門家は宿敵だ。

姫沙の細い眉がびくつと動いた。

「酷いことを言うわね。昨日は私のあんなとこ見ちゃったのに」

「……教室でその話はやめろ」

「誰にも聞こえないわ。それで、昨日の感想は？ また見たい？」

「見たくない！」

正直、また見たくて仕方ない帝である。

敗北は許されないが、恋愛ゲームに勝てば堂々と姫沙の裸を見ることができ……なんて考えてしまっている帝である。

「更衣室に入ってきたときも、しばらく私に見惚れていたじゃない」

「見惚れていない！ あんなもの見せられて、迷惑でしかなかった！」

「め、めいわ……」

姫沙が言葉に詰まった。その唇がぎゅつと噛み締められる。

「あ、いや……」

今のは少し言い過ぎだったかと、帝は後悔する。

姫沙が帝を睨んだ。

「あれを見た男は、北御門さんが初めてなのよ!? ちよつとは感謝の言葉くらい、かけてくれないと思うけれど！ 土下座して『ありがとうございます、俺は姫沙様の奴隷になります、大好きです』と言うべきよ！」

「どさくさに紛れてなんの提案をしている！ それは俺が一瞬で負ける奴だろう！」

「だったら、『ありがとうございます、あのお姿を目に焼きつけて、頑張って戦ってきます』と言うべきよ！」

「二度と戦場から帰ってこなさそうだな！」

涙目でまくし立てる姫沙に、どう謝罪したらいいのか困る帝。

下手なことを言ってしまったえば好意の表現と判断されそうで、気を抜けない。

たとえば、『迷惑なんかじゃないし、むしろ眼福だった』などと素直に言えば、それは好意の表現ではないのか。

——いやいや！ 別にそんなことは思っていないがな！ めちゃくちゃ可愛かったとか、危うく理性を失いそうなレベルだったとか、別に思っていない！

意識したら危険。

本音があるがままに受け入れたら、きっと姫沙には抗えない。

帝は自分に言い聞かせる。

そこへ、クラスメイトの少女が駆け寄ってきた。

「姫沙ちゃんの貴重な泣き顔ゲットっ！ いい表情いただきですっ！」

少女の構えたカメラから、フラッシュの光が瞬く。

瞬時に帝は教科書で自分の顔を隠し、写真に自分が写り込むのを防いだ。

北御門家奥義の一つ——阿修羅千枚隠し。

いかなるバラツチに密談の現場を押さえられようと、決して証拠を掴ませず、顔だけは完璧に隠す。

これが当主レベルになると、自分だけではなく現場のあらゆる権力者の顔を手近の盆や座布団で隠し、密談の存在すらもなかったことにしてしまう。

クラスメイトの少女——瓦屋木影は頬を膨らませた。

「もー！ 帝くん、なんで顔を隠すんですか！ 帝くんが姫沙ちゃんを泣かしてる決定的シーンが撮れるとこだったのにー！」

「俺の写真は許可制だ。撮るなら南条だけにしろ」

「私の写真も許可制よ。撮るなら一族根絶やしにされる覚悟をなさい」

「ひいひい!!」

南北二人から睨まれ、瓦屋木影は震え上がる。

しかし、彼女が危険な存在だということを帝は知っている。

瓦屋一族は、歴史の裏で暗躍してきた情報屋の血筋だ。

闇を謀略で支配する南条一族とは異なり、瓦屋一族の武器は情報。権力者の急所ともいうべきネタを掴むのを得意とする。

だが、その本質は……混沌の召喚者。

せっかく手に入れた密書をうっかり紛失してしまったり、情報屋として忍び込んだ先でうっかり兵器庫を爆発させてしまったりと、うっかり破壊的な混沌を巻き起こして時代の転換点に影響を与えてきた。

織田信長が無勢で本能寺にいるとの情報を明智光秀にうっかり漏らし、信長の死の引き金

を引いたのは瓦屋一族。明智光秀の居場所を豊臣にうっかり漏らし、三日天下に終わらせたのも瓦屋一族である。

緻密な計算で趨勢を争う北御門と南条にとって、これほど扱いづらい相手はいない。そして木影は、瓦屋きつての混沌の召喚者……率直に表現するなら最凶のアホと目されている。

——尻尾を掴まれるわけにはいかない……。帝は警戒心を込めて木影を見据えた。

木影のくりくりとした瞳の中に宿る、抜け目のない光。

色素の薄い癖っ毛は無秩序に跳ね回り、愛敬に溢れた顔立ちを囲んでいる。

華奢な体が驚くほど敏捷に姫沙から飛び退き、大切なカメラを守る。

はち切れんばかりの胸が、激しく揺れて周囲の視線を奪う。

「それで、どうして姫沙ちゃんは帝くんに泣かされてたんですか？ 『更衣室』なんて気になる単語が聞こえた気がしたんですけどっ！」

木影はカメラのマイクロSDカードをしまい込み、ぐいぐいと帝の方に押し迫ってきた。

——やっぱりこいつは油断ならない！

他の生徒たちは気づいていない秘密の匂いに勘付き、すかさず突撃までしてきている。可愛らしい外見とは反対に、決して隙を見せられない相手だ。

もし昨日の事件を木影に押さえられたら、いや、恋愛ゲームについて嗅ぎつけられたら、帝は破滅だ。うっかり木影が情報を漏らして夕方のニュースで爆発なんてこともあり得る。

それは否。

尻尾は掴んでも掴まれるなを家訓とする北御門家にとつて、許されない大失態。

「瓦屋……お前はなにも聞いていない。聞かなかったんだ。いいな？」



帝は木影の肩を鷺掴みにしてささやいた。

「聞きましたよ！二人で密談してましたよ、教室の真ん中で！」

「いやそんなアホなことはしていない……さすがにアホすぎる……成績トップクラスの俺と南条が、そこまで適当なわけがないだろう」

「誤魔化そうとするということは、あれですよ？ 事件ですよ！ 帝ちゃんと姫沙ちゃんが更衣室で……そういうことですよ！？」

木影は目をきらきらと輝かせた。

「くそ、鋭い！このままでは恋愛ゲームどころか俺の人生がゲームオーバーに！焦って打開策を考える帝。」

「まさか……こんなに早く私の手を汚さないといけなくなるなんて……」

姫沙は物騒なことをつぶやいている。

木影が胸を張って言い放つ。

「ふーん、推理が完成しましたよ！つまり、更衣室で二人が埋蔵金を発見して、その分け前について言い争っていたんですね！どうしても帝くんが三割ほしいと言うから、九割は自分のものだとして姫沙ちゃんが号泣を……！」

「それは俺が泣くべきだろ！」

「いえ、そういう状況になったら私が泣くわ。十割は確保しておきたいから」

「強欲の悪魔か！」

南条家の恐ろしさを再認識する帝。

「どうですか、わたしの推理は!?」

どこから出したのか、木影は帝と姫沙に細いマイクを突きつける。

「ええ、完璧よ。さすが瓦屋さん……見抜かれちゃったわ」

姫沙は頭を振って嘆いた。

「南条……?」

眉をひそめる帝に、姫沙が目配せして黙らせる。

「でも、埋蔵金というより、ただの忘れ物だったの。残念ながら北御門さんが職員室に届けてしまったから、私の懐には一銭も入ってないわ」

「そうだったんですか」

「そうだったのよ」

「おかしいなあ……。日本の未来を変えるような、とんでもないネタの匂いがしたんだけどなあ……。はあ……」

木影はため息をつきながら自分の席に戻っていった。

——その通りだよ、瓦屋！

ぎりぎりで自爆してくれたお陰で命拾いしたが、さすがの嗅覚。一見平凡に見えるこの教

室では今、光と闇の闘いが始まろうとしているのだ。

姫沙は木影が椅子に座るのを見届け、帝にささやく。

「感謝してね。私たちのゲームを、こんなところで終わらせるのは退屈でしょう?」

「俺は退屈な学校生活で構わないんだが……」

帝は肩をすくめてつぶやいた。

ホームルームの時間。

教壇に立った担任教師が、おもむろに切り出す。

「じゃあ、学期始めだから委員を決めるぞ。みんな、やりたいことは決まってるか?」
やにわに教室がざわついた。

蒼世学園の委員会活動は、各クラスから男女のペアを何組か選んで行われる。

放送委員、風紀委員、図書委員、清掃委員など、様々な委員会があるが、誰とペアになるかによって一学期の幸福度が決まる。

クラスメイトが色めき立つのも仕方ない。要するに、青春がかかっているのだ。

隣の席から、姫沙が帝に微笑みかける。

「北御門さん、一緒に委員になれるといいわね」

「!?」

突然の宣戦布告に、帝は身をこわばらせた。

この言葉は恐らく、こういうことである。

『北御門さん、一緒に委員になれると(ゲームが私の有利に進んで)いいわね』
ということである。

委員会は男女が協力して作業をしなければいけないため、二人きりの時間が増える。そうなれば、姫沙が攻撃を仕掛けやすくなるのは必然。

もちろん、帝にとっても攻撃のチャンスだが、姫沙が自分から同じ委員を希望してきた以上、そこには秘策があるに違いない。

——敵のフィールドにあえて踏み込むのは愚策だ……ここは回避する!

決して姫沙と同じ委員を選んではならないと、帝は判断した。

人気があるのは、圧倒的に放送委員。逆に人気がないのは清掃委員と図書委員だ。

清掃委員は枠が大きいので二人きりのリスクを減らせるが、その代わり姫沙と同じ委員になってしまう可能性が上がる。

図書委員は男女一名ずつの枠なので必ず二人きりになってしまいが、姫沙を排除することさえできれば、仕事中は恋愛ゲームから保護される。

——図書委員で決まりだな。

帝はそう計算し、姫沙に笑みを返した。

一緒にの委員になれるといいわね、と声をかけられてから計算を終えるまで、実にコンマ一秒。北御門家の後継者として、南条家の陰謀に負けるわけにはいかない。

「北御門さんはなんの委員になるつもりなのかしら？」

「ははは……そうだな、どの委員も大変魅力的だが、できれば北御門家にふさわしく華のある放送委員などがいいな」

「なるほど……じゃあ、私も放送委員で。二人で花形のアナウンサーになりましょうね」

「ああ、是非二人で頑張ろう」

「ふふふ……」

「はははは……」

虚偽で塗り固めた笑い声が、二人のあいだで響く。

担任教師がそれぞれの委員会の希望者に挙手させ、黒板に名前を書いていく。

姫沙は動向を探るようにして、じーっと帝の方を凝視している。

そして、時は来た。

「次。図書委員になりたい奴は手を挙げろ」

「はい」

よく通る声で帝が返事をしつつ、真っ直ぐに手を伸ばす。

「はあああああああいつ！ はいはいはいはあああああいつ！」

何十人もの女子生徒が、一斉に手を挙げた。

「何事だ!？」

帝は驚愕する。

図書委員という仕事は、地味で無闇に力が要って、人気がない選択肢だったはずだ。

実際、挙手している男子は帝だけ。なのに、なぜ女子は図書委員を選んだのか。

恋愛禁止の掟の下に育てられた帝は、女の気持ちがいっつも一切理解できない。その弱点は自覚しているが、ここまで予想外の現象が起きるとは信じられなかった。

帝は恐ろしいものを見る目で、姫沙を見やる。

「これは……お前の策略か……?」

「そ、そそそそ……」

姫沙は自らも手を挙げながら、引きつった顔でうなずく。

帝は震えた。

「目的が分からん……俺をハメるつもりなら、わざわざ立候補者を増やす意味なんてないはずだ……お前、なにを考えている……?」

「私に聞かないで！」

あーもーっ、とつぶやきながら、姫沙は机の下で地団駄を踏んでいる。

担任がため息をついた。

「まったく、集中しすぎだぞ。気持ちとは分かんんでもないが……」

教師の言葉に、クラスの女子生徒たちが居心地悪そうにもじもじする。

——凡俗の担任が理解している心理を、俺は理解できていない!?

帝は衝撃を受けた。

思わず立ち上がり、クラスメイトたちに視線を走らせる。

「なぜだ!　なぜ、お前たちは図書委員なんかになりたいんだ!　説明してくれ!」

必死の訴えだった。

すると、女子たちは帝の視線を避けるようにしてうつむく。

「なんでって、ほら……ねえ?」ちよっと北御門くんには説明しづらいというか……「分からないでほしいというか……」分らないのがまた可愛いんだけど……」

余計に混乱する帝。

——可愛い!?　つまりこの俺は、やがて日本を背負って立つべき俺は、クラスメイトからマスコット扱いされているということか!　北御門帝、一生の不覚!

あまりにもショックが大きかったせいで、姫沙の動きに対する警戒が薄れる。

そのとき、姫沙が教室を見回しながら言い放った。

「そんなに北御門家のお嫁さんになりたいなんて、みんな可愛いわね。どれだけ北御門家の財

産がほしいのかしら?」

「ち、違うから!」そういうのじゃないから!」財産とかじゃなくて!」

ざわめく女子生徒たち。

「でも、そう思われても仕方がないわよね。北御門さんと仲良くなれば……いずれは日本の

トップに君臨できるかもしれないんだから」

南条姫沙はにつこりと笑った。

だがその笑顔に善意は少しもない。闇のオーラが全身から噴き出し、巨大なブレッシャーとなって教室にのしかかっている。

手を下ろさないと、地獄に墮とすわよ?

そんなメッセージが、否が応でも伝わってくる。

女子生徒たちが、一人、また一人と、手を下ろしていった。

そして、挙手している女子は姫沙が残るだけとなる。

帝は目を見開いた。

「なんて奴だ……。あれだけ言っておきながら、お前は手を下ろさないのか……?」

「だって私の家は、北御門家の財産なんてなくても充分お金持ちだし。誤解される危険なんないでしょう?」

姫沙は丸めた手を口元に添えて微笑した。

「『ずるい!!』」

はめられた女子全員が唱和する。

担任教師は困ったように頭を掻いた。

「じゃ、じゃー、図書委員は北御門と南条でー。お前ら、喧嘩けんかせず仲良くやれよー」

「はい、もちろんです」

姫沙はうなずき、帝の方に目をやる。

「仲良くしてね、北御門さん（そして私のフィールドへようこそ）」

「聞こえないはずの心の声が聞こえる!？」

弱冠十七歳にして幻聴に苦しめられ、帝は医療機関の受診を検討した。

南条家の邸宅の一室——通称・謁見の間。

政治家や犯罪組織の首領、名うての詐欺師など、様々な闇の住人が当主にお目通りするその部屋には、常に盗聴防止のジャミングがかかっている。

そして来訪者の心拍音のパターンや言葉、表情、虹彩、指紋等はきっちり記録しているというアンフェアっぷりだ。

それでも闇の住人たちが大金を払ってこの部屋を訪れようとするのは、偏に当主の知恵を拝

借したいから。

今日も当主の南条才さいは、牛革張りの重厚な椅子に鎮座して、九十九歳の老婆とは思えぬ眼光を放っていた。

向かいの椅子に座っているのは、次期後継者と見込んでいる孫の姫沙だ。

「で？ 恋愛ゲームとやらの首尾はどうだい？」

才が眉を上げて問いかけた。

「北御門さんから惚ほれられている感じはしません。むしろ恐れられている気がします」

「お前は愛敬が足りないからだだよ。色気も足りない。もっと北御門の小僧に媚びないか」

「まだ始まったばかりですから。今後の活躍にご期待ください」

姫沙はくすりと笑った。

「全力でおやり。北御門の小僧を籠絡できなかつたら、家はお前の妹に継がせるからね」
才の言葉を聞いて、妹の美月みづきが歓声を上げる。

「えっ、マジマジ!? だつたらアタシ、家の力で日本中にマツクとジョイフル造らせるー!」
日本中の人がいつでもいっぱい駄弁だべれるようにするんだー!

などと宣言する美月は、絨緞じゅうたんに寝転がってスマートフォンでゲームに熱中している。中学二年生にして、毎月百万近くガチャを回している重課金兵だ。

「このアホに家を継がせるんですか……」

「そのアホに家を継がせるしかないんだよ、お前が失敗したらね！」
 姫沙も才も言いたい放題だった。

「南条家が滅ぶと思います」

「お前が北御門の小僧に勝てばいいだけさ。お前の頭なら、できないことはないだろう」
 無理と答えたら命はない、と思わせるような視線。

そんな威圧を受けながらも、姫沙は平静を装う。

「……とりあえず、生物学と心理学の論文を読み込んで、攻略の計画を練っています」

「それじゃあ足りないね。これを使いな」

才が呼び鈴を鳴らすと、入り口の扉から黒服たちが現れた。床にスーツケースを並べ、蓋を開いていく。

中に入っていたのは、何百冊もの本。

「これは……？」

「『花とうめ』のマンガ、十年分さ。これを読んで少しは色恋の勉強をしな」

「少女漫画で勉強になるんでしょうか……」

姫沙の疑問に、当主の老婆は重々しくうなずいた。

「ああ、なるとも。恋愛のことは少女漫画を読めばすべて理解できる」

「そうなんですか……少女漫画って恐ろしいものなんですね……」

人類の叡智が詰まった書物をスーツケースから取り、姫沙はつぶやいた。くだらない一般大衆の娯楽だと侮っていたが、その認識は間違っていたのだ。

当主はにやりと笑う。

「なあに、心配しないでも、お前がよほど失敗しない限り、南条の小僧はお前に惚れるよ」

「そうでしょうか」

「ああ。人間の恋愛とは結局、遣伝子に支配された行為……遣伝子の差が激しい者同士ほど、惹かれ合うと言われている。そして、北御門と南条は太古の時代から、一度も交わったことがない。遣伝子の差異はどこまでも大きい。この意味が分かるかい？」

「……遣伝子レベルで北御門は南条を求めていると？」

そんな理論、姫沙は好きになれなかった。それでは人間が動物と変わらないではないか。人間はもっと、奥深い感情と頭脳で動く生き物だ。

けれど、当主は飽くまでドライな説にこだわる。

「その通り。逆に言うと、お前も必ず北御門に惹かれてしまうということでもあるがねえ」

「……………」

姫沙は体を凍りつかせた。

遣伝子のせいだなんて、考えたくはないけれど。

帝から目を離せない、彼のすべてを手に入れたい、どうしようもなく抗いようもないほどに。

だが、そんな気持ちを南条家の当主に悟られるわけにはいかない。

「……ありません。私は今まで、どんな男にも惚れたことがないのでから」
姫沙は硬い口調で告げた。

「そうかい？ でも、北御門の小僧のことはちょっといいと思ってるんじゃないか？」
ちよっとどころじゃありません！

と姫沙は答えたかったが。

「ま、まさか。ああいう男は、一番嫌いなタイプです」

「……本当かねえ？ 非の打ち所のない男じゃないか、あれは」

そうなんです、完璧に素敵な男性なんです！

と姫沙は答えたかったが。

「そこが鼻につくのです！ そ、そばにいるだけで、気分が悪くなります！」

必死に無表情をこしらえ、言葉をこしらえ、虚偽の仮面を分厚く塗りたくって通した。

「ふうん……？」

才は舐め回すように姫沙を観察する。

——う、疑われてる……？

姫沙は息を詰めて才を見つめ返す。

落ちくぼんだ眼孔の奥から覗き込んでくる才の眼は、とても恐ろしかった。まるですべて

を見通すような迫力。指先一本で人を殺すことのできる権力。

姫沙は喉から言葉を絞り出す。

「北御門の後継者と同じ年で男と女……私の代は、北御門家を乗っ取る絶好の機会です。今こそ、南北の永い争いに決着をつけるときなのです」

「必ず勝たないと許さないよ。もし、北御門の小僧に落とされるようなことがあったら……」
南条家当主の才が低い声で脅す。

「はい。どんな手段を使っても北御門帝を陥落させてみせます」

姫沙は少女漫画を胸に抱き締めて言い放った。

図書委員の作業、当日。

その日は帝と姫沙の二人で本の整理をやることになっていた。

帝は緊張を覚えながら、図書室の前の廊下に立つ。

隣には、姫沙が顎をそびやかして並んでいる。相変わらずの愛くるしい姿だが、その肩からは闘志が吹き上がっている。少し油断したらすぐ魂を取られそうだ。

「やっと一緒にお仕事できるわ。楽しみね、北御門さん」

「あ、ああ……」

姫沙に微笑みを送られ、帝はぎこちなくうなずいた。

本来、女子との共同作業は多かれ少なかれ心浮き立つものだ。相手が姫沙のように美しい少女なら、なおさら。けれど今の帝は姫沙を脅威とは思えない。

「いつになったら中に入るのかしら？ もう十分くらいここに立っているけど……」
「……ちょっと待ってくれ」

今日の作業のため、根回しは済ませておいた。二人きりの作業という危険な状況に陥らないよう、隣のクラスの図書委員に手伝ってもらう約束を取り付けておいたのだ。

——なにを考えているか知らないが、南条の思い通りにはさせん……！

帝はポケットの中のスマートフォンを握り締めた。

すると、姫沙が図書室の扉を見つめたままつぶやく。

「……隣のクラスの人なら、来られないわよ」

「……なんのことだ？」

「隣のクラスの図書委員なら、今日は都合が悪くなるから来られない、ということよ」

「都合が悪くなる……？」

奇妙な言葉に帝が眉を寄せたとき、スマートフォンが振動を始めた。

ポケットから出して画面を見る。表示されているのは、帝が共同作業を頼んだ委員の名前。

「もしもし、どうした？」

帝が急いで通話ボタンを押すと、スピーカーから弱々しい声が聞こえた。

「すまん……北御門……。図書室には行けそうにない……オレはもうダメだ……」

「本当にどうした!？」

『いきなり教室に黒服の連中が突っ込んできて、オレを無理やり車に押し込みやがったんだ……すっげえ高そうな車でさ……はは、オレ、これからどこへ連れてかれるんだろうな……』

「拉致!？」

帝は心臓を凍りつかせて姫沙を見た。

姫沙はにこっと楽しげな笑みを浮かべる。

——こいつは、悪魔か！ 二人きりの作業のためだけに、生徒を誘拐するなんて！

帝は口元を手で覆って声を潜める。

「落ち着け。俺が必ず助けてやる。今、どこだ？ もう校門は出たのか？」

『あ、いや、助けとかはいいいから。むしろ来ないで』

「……は？ 脅されてるのか？」

『そうじゃなくて、黒服さんたちが……すげえ美女ばっかりなんだ！ オレが逃げないよう左右から腕をねじ上げてきて、でかい胸が押しつけられて……ああもう、分かるだろ!? 分かってくれるだろ!?』

「分からん!」

『とにかくオレはもうダメだ！ これは裏切りではない！ オレは男の本能に従うのみである！ すまんな北御門！』

通話は終わった。

「裏切り者があつ！」

「しっかりと、北御門さん。自分のスマホを怒鳴りつけるような人が隣にいたら、私が怯えちゃうわ」

などと言いつつ、姫沙は目をきらきらと輝かせている。してやったりとの喜びが全身から放たれている。

——恐るべし南条一族！ こっちの思惑まで読んでいたのか！

帝は奥歯を噛み締めた。

「さあ、北御門さん！ 無駄な抵抗はやめて図書室に入りましょう！ そして私の手中に堕ちなさい！ さあさあ！」

姫沙は帝を引つ張って図書室に引きずり込もうとする。

と、姫沙のスカートの中から、金属音と共になんらかのメカが床に落ちた。

「……………」

「……………」

沈黙する二人。

そのメカは、どう見てもスタンガンだった。体に押し当てることによって強い電気ショックを喰^くわせ、相手を行動不能にするためのアレだった。

「南条……図書室は武器の持ち込み禁止だ」

「そんな校則ないわよね！」

「校内への武器の持ち込みは想定されていないからな！」

「校則に書いてないならなにをしてもいいのよ！」

「ダメに決まってるんだろ！ 一般常識だ！」

「武器がダメなら校門に金属探知機を置くべきよ！」

「ここは日本だ！ 他にも持っていたら出せ」

帝は姫沙に手を突き出した。

「ほ、他に持っているわけがないでしょう！ スタンガンは一台だけよ！」

「今スタンガンはって言ったな!? スタンガン以外には持ってるんだな!?」

姫沙は目をそらす。

開いた窓縁に腕を載せ、美しい景色を眺めながら、ささやく。

「……黙秘権を行使するわ」

「そんな権利あるか！ 素直に出せ！ さもなくば警察を呼んで今日の作業は中止にする」

「警察の一人や二人、すぐに南条の力で潰してあげるわ！」

「じゃあ警察を呼ばずに作業を中止にする！ 身の危険を感じるから俺は帰る！」

帝と姫沙は廊下の真ん中で火花を散らした。

正面から攻撃されるのなら、帝は相手が暴漢でも負けない心得はある。しかし、背後からクラスメイトに襲われたら抵抗のしようがない。

姫沙は大きな瞳を瞬かせた。

「私……思うの。どんな理由でも仕事を放り出す人間は最低だって。委員会の仕事は命がけでやり通さなくちゃいけないって」

「クラスメイトに電気ショックを浴びせようとしている人間の方が最低だ。早く出せ」

帝は冷徹に言い渡した。

姫沙は頬を膨らませる。

「だったらボディチェックでもなんでもすればいいじゃない！ その勇気があればだけど。恋

愛経験ゼロで女の子に免疫がない、北御門帝さん？」

「ああ、分かった。それならチェックさせてもらう」

売り言葉に買い言葉。

帝が近寄っていくと、姫沙はぎよつとする。

「え、ちょ、ちよつと、本気……？」

「お前が言ったんだからな。嫌とは言わせない」

「ま、待って、心の準備がっ……」

「じっとしてろ」

帝は姫沙のスカートのポケットに手を滑り込ませた。

布のなめらかな感触。丸みを帯びた太ももの形を、手の平に感じる。冷たい布と布の隙間^{すきま}をすり抜けるようにして、ポケットの奥へと潜り込んでいく。

「んっ……」

姫沙が身をよじった。

「へ、変な声を出すな」

「北御門さんの触り方がいやらしいからでしょ！」

「いやらしくはない！」

「いやらしいわ！ 絶対エッチなこと考えてるでしょ！」

「考えてはいない！」

大嘘だった。

平静を装うのが死に物狂いなレベルで、帝は体温の上昇を感じていた。

「ぶ、武器を持ってるとか言いがかりをつけて女の子に触るなんて、とんだケダモノね！」

姫沙は真っ赤な顔で抗議する。

「いや……言いがかりではないよな？」

帝は姫沙のスカートのポケットから、注射器と接着剤を取り出した。図書委員の作業に使う道具ではない。

姫沙はしらばつくれた。

「なにが悪いのかしら。注射器は武器じゃないわよね。ジャンキーなら誰でも持ち歩いているわよね！」

「それも犯罪だ！ お前はジャンキーなのか!？」

「まさか。ボディチェックはこれでおしまいかしら？」

「まだだ……」

帝は姫沙の髪の中に指を差し入れた。ヘアピンとは違う光り物が覗いた気がしたのだ。中をまさぐってみると、明らかに固い物体が隠れているのが分かる。

「あ、あんまり、髪さわわしないで……」

姫沙は羞恥に震えながら堪えていた。

そんな彼女の姿を見ていると、帝まで鼓動が速まってしまう。

平常心だと自分に言い聞かせつつ、髪のでかい細長い物体を抜き取った。

「……やっぱり。なんだこれは」

帝が目の前に差し出すと、姫沙は柳眉を寄せる。

「……吹き矢ね。今日、学校の帰りに熊狩りをする予定だったから」

「絶対に嘘だろ！ 狩られるのは俺だったろ！」

「いるのよ、大きな熊が。通学路の幼稚園の近くに」

「何人か喰われてるだろそれ！」

「ええ……私の母も何人か……」

「お前、母が何人もいんの!？」

姫沙が帝を睨む。

「もういいかしら!？ さつきから難癖をつけられて体に触られてばかりで、委員会の仕事が始められないのだけだ！ セクハラも程々にしてほしいわ！」

「逆ギレだも!? 最後にこれを没収させてもらう！」

帝は姫沙の襟から不自然に突き出している紐を掴んだ。

姫沙は体を抱き締めて抵抗する。

「それだけはやめて。その紐を引っ張ったら、私の全着衣がほどけるわ」

「そんなわけがあるか！」

帝は姫沙の制服の中に隠されている紐を一気に引き抜いた。

没収した品を、犯罪の証拠品のように廊下の床へ並べていく。

スタンガン、注射器、吹き矢、接着剤、そしてロープだ。

「……吹き矢かスタンガンで俺を無力化した後に、注射器で睡眠薬を静脈注射し、図書室の扉

に接着剤を塗り込んで密室を作った上で、ロープで縛り上げて監禁するつもりだったのか」

「予知能力者……!？」

姫沙は目を丸くした。

帝はため息をついて没収品をまとめる。

監禁してからどういう方法で籠絡する作戦だったのかは分からないが、ろくでもない洗脳等が施されたことは間違いない。

「もう武器は持っていないよな？」

「ええ。『武器は』持っていないわ」

「まだボディチェックをしないといけないみたいだな！」

「いいのかしら、そんなことをしていて。ちよつとまずい子が来ているみたいよ？」

姫沙が指差した廊下の端に、瓦屋木影の姿が見えた。

いつものごとくカメラを片手に、被写体^{エモ}をきよろきよと探している。

「くっ……」

「私は瓦屋さんの前でセクハラをされても堪えてみせるけれど、北御門さんは困るわよね。スキャンダルで破滅しちゃうものね？」

楽しみに笑う姫沙。

帝は齒ぎしりした。

「仕方ない……武器を持っていないなら……まあ、いいか」

「ふう……やつと委員会の仕事を始められるわ……」

「誰のせいで遅れたと思っている！」

「スタンガンを落とした私のせいよね。武器の所持を気づかれるようなミスをして、本当にこめんなさい。今度からしっかりと隠蔽^{いんぺい}するわ」

「その謝罪はおかしい……」

釈然としない思いを抱えながら、帝は図書室に足を踏み入れる。

鼻腔に流れ込む、ふくよかな書物の薫り。

緊張感に満ちた、無人の部屋。

大量に本の詰まった棚の数々。

姫沙がびしやりと扉を閉める音。

——ここが……、俺たちの戦場だ。

正確には図書室だった。

武器を取り上げて安全性は高まったが、まだ安心はできない。これからが本番だ。

北御門一族の未来のため、そして日本の未来のために、全力を尽くさねば。

そんな決意と共に、帝は姫沙の方を振り返る。

「それじゃ南条、本の整理を始め……」

見れば、姫沙はきゅっと唇を結んでいた。色白の脚が、小さく震えている。

「もしかして……緊張してるのか？」

「え!? そ、そんなはずないわ! 私は狩る側、あなたが狩られる側なのだから、私が緊張するのは変でしょう!? あり得ないわ!」

慌てたようにまくし立てる。

「……本当か？」

「ほ、本当よ!」

帝が顔を寄せると、姫沙は後じさる。背中が扉にぶつかり、身をこわばらせる。

びくびくと見上げる姿は、なんだか怯える小動物にも似ていて。

「声が裏返ってるぞ?」

「これが地声よ! ええっと、私たちが担当するのは、文学と芸術と語学の棚よねっ!」

姫沙は帝の脇^{わき}をすり抜け、棚の方へ駆けていった。

二人で手分けをして、本の整理を始める。

生徒が適当に本を返すせいで、棚には番号の意味もないほど無秩序に本が置かれていた。

それを一つずつ並べ直す作業は単調だったが、帝に冷静さを取り戻させてくれる。

戦場に入ったからには、全力で攻撃をしなければならぬ。できれば、この戦いで姫沙を帝に惚れさせたい。

そのための道具は、ちゃんと用意しているのだ。さつきは姫沙のボディチェックを行ったが、実は帝もポケットにいろいろと隠し持っていたりする。

——まずは……、頼りがいのあるところを見せて攻めるか。

帝はポケットから小箱を取り出した。小箱の中から蜘蛛をつまみ、姫沙の足下にそっと置く。怖がる姫沙を守って蜘蛛を追い出し、男らしさを見せつける作戦だ。

とんだマツチポンプだとは思いますが、毒のない蜘蛛を選んでいるから実害はない。最大の問題は、南条一族の後継者が蜘蛛ごときを恐れるかどうかなのだが……。

本をしまう場所を探していた姫沙が、蜘蛛の存在に気づいた。

じっと、静かな視線を足下の蜘蛛に注ぐ。

——やっぱ、南条家に蜘蛛なんて効かないか!

帝が落胆したとき。

「……………っ……………っ……………」

姫沙が震え始めた。

目を見開き、本を握り締めて硬直しきっている。

怖がるというレベルではない。

ショック症状だった。

「お、おい!? 蜘蛛、そんなに苦手なのか!」

「に、苦手じゃないわ！ 南条の後継者に苦手なものなどないわ！ 私はあらゆる存在を統べる闇の支配者になるのだから――」

「目が死んでるぞ!？」

拒絶反応が帝の想定を超えていた。

姫沙は袖そでの中から小さなスイッチを取り出し、わななきながら押そうとする。

「ふ、ふふ……こうなったら、このスイッチで……」

「なんのスイッチだ！ いうかまだ武器を持ってたのか！」

「大丈夫、これですべて解決だから……全校生徒が苦しみから解放されるから……」

「人生からも解放されるだろ！」

「いいえ、新たな世界に旅立つだけ……そう、終わりは始まりに等しいのだから……」

「なんか知らんがやめろ!!」

帝は姫沙からスイッチを奪い取ると、床の蜘蛛をつまんで窓の外に放り投げた。後で爆弾解除班を呼ばなければ……と考えながら姫沙の方を振り返る。

姫沙は床にべたんと座り込んでいた。

つぶらな瞳を潤ませ、まるで救世主を見るかのように帝を見上げる。

「あ、ありがとう、北御門さん……。敵を助けるなんて、すごく優しいのね……」

「ぐ……」

帝は胸に壮絶な痛みを覚えた。

一つは、姫沙の弱々しい姿に心臓を撃ち抜かれた痛み。

一つは、北御門家ともあろうものが女子を泣かせてしまったという罪悪感の痛みである。

「た、たいしたことじゃないさ……」

姫沙は微笑みながら首を振った。

「ううん、たいしたことよ。私だったら、相手を思う存分怖がらせた上ですがりつかれてから蜘蛛を追いつ出すもの。もちろん、北御門さんと違って蜘蛛も自分で用意するけど」

「ぐっ……」

まさに蜘蛛を自分で用意した犯人であるところの帝は胸を押さえた。

姫沙は頬の涙をそっと拭く。

「本当にありがとう、北御門さん……。あなたは私のヒーローだわ……」

「本当に申し訳ない!」

帝は姫沙に全力で頭を下げた。これ以上の責め苦はやめてほしかった。

「どうして謝るの?」

きよんとする姫沙。

「いや……まあ、とにかく悪かった……」

今後、マッチポンプはやめておこうと痛感する帝である。闇の南条家ならともかく、光の北

御門にとって、こういう搦め手は罪悪感の元だ。

「変な北御門さん。ごめんなさいね、作業を止めてしまつて」

「南条は悪くない……死なないといけないのは俺だ……」

「どうして北御門さんが死ぬのよ。それより、ちよつと高いところの本を整理したいから、台を支えてもらえるかしら」

「あ、ああ」

帝が近くの踏み台を押さえると、姫沙は本を抱えて台を登っていく。

途中で帝を見下ろし、ふふつと悪魔の笑みを浮かべる。

即座に、帝は姫沙の思惑に気付いた。

——そういう作戦か！

——そういう作戦よ！

いつの間にか睨み合うだけで会話ができるようになって二人だった。

この位置関係なら、姫沙がもう少し台を登るだけで見えてしまふ。言わずもがな、パンツがある。

かつて源平の戦いにおいて、南条一族は下着姿の女を戦場に走らせることで敵軍の注意を散漫にさせ、平家の滅亡を招いたという。

すなわち、南条一族のパンツは最終兵器……タルタロスの巨人なのだ。パンツ一枚で国家の

行く末を歪めるのが、南条家の底力だ。

——南条のパンツを見てしまつたら、俺はこの戦いに負ける……！

帝はそう直感した。

性欲——それは恋愛における重要なファクターである。性欲が上昇するほどに人は理性を失い、愚かな恋に吞まれやすくなっていく。

そういった意味で、パンツとは無限の可能性を秘めた攻撃と言える。
ただでさえ可愛い姫沙が、パンツなどを覗かせてきた日には……その破壊力は十億倍に達してしまふ。二人きりの空間で正気を保つ自信は帝にはないし、翌朝からは挨拶もまともにできないだろう。

「くくく……だが、俺を甘く見たな、南条。こういうときの備えは万端だ」

「なっ……!!」

身構える南条の目の前で、帝はポケットから取り出したアイマスクを装着した。

真っ黒な布に視界を完全に覆われ、パンツどころか世界の森羅万象が消え失せる。

性欲への強大なる隔壁。

たとえ世界がパンツに埋め尽くされようとも、見えなければ存在しないのと同じ。

「それは卑怯じゃないかしら!?」というか危ないわよね!」

「危なくなどない! 俺がしっかり踏み台を支えているからな! そしてこのアイマスクは特

注品！遮光率は百パーセント！たとえ南条のパンツが超新星爆発級の光を放とうと、決して俺の視界に入ることはない……っ！

帝は高らかな笑い声を響き渡らせた。

ざりつと歯を食い縛る姫沙。

それも当然だろう、最終兵器を最強の盾で封じられてしまったのだから。帝はささやかな勝利に、さつきまでの罪悪感が薄れるのを感じる。

姫沙はため息をついて台を登っていく。

「仕方ないわね。さつきと上の段の整理を済ませるわ……きゃっ」

「南条!? 大丈夫か!」

もしや足を滑らせたのかと、帝はひやりとしてアイマスクを外した。

しかし、その視界に入ったのは……意地悪な表情で見下ろす姫沙の姿。そして、パンツはしっかりと見えてしまっている。

黒。

闇の黒である。

レースの縁飾りである。

純白の尻である……!

「ぐうううっ……!」



帝は五千億のダメージを受けて床に突っ伏した。
荒ぶる鼓動、暴走する呼吸を、円周率を無限に暗唱することで必死に整える。

そこへ姫沙が降りてきて、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「あら、どうかしたの？ 私のタイツを見て欲情したのかしら？」

「タイツ……？」

「ええ、パンツのような柄をシミュレートしたタイツよ。まさか、北御門家の御曹司ともあろう者が、パンツとタイツを見間違えるなんてことはないわよね？」

「そ……それは……」

ダメージの受け損。タイツだろうとなんだだろうと見た目がパンツである以上、そこから発生する攻撃力は同じなのだ。

自らは傷つくことなく敵のみに損傷を与える南条家の非道さに、帝は改めて義憤を覚える。決して南条許すまじとの決意が高まる。

二人は並んで本の整理を続けた。

放課後の図書室は、静けさに満ちていた。

本の擦れる音、二人の小さな足音、そして校庭から流れ込む遠い喧噪けんそうのみが聞こえている。と、作業に夢中になっていた姫沙が、帝にぶつかってきた。

ほんの少し、肩が当たるだけの接触。しかしそれだけで姫沙のやわらかな感触が伝わってき

て、帝は身をこわばらせる。

「あっ……ごめんなさい」

「い、いや……」

姫沙はすぐに帝から離れる。

再びの無言。二人はなにもなかったかのように仕事を進めるが、姫沙の耳は赤くなっている。そんな彼女を見ると、帝まで耳の温度変化を認識した。

やわらかな沈黙。でも、嫌な空気ではない。たとえ北御門と南条の人間であろうと、今だけは単なるクラスメイトの男子と女子であるかのようにだった。

「南条は……本を読んだりするのか？」

帝がつい尋ねてしまったのは、この時間を少しは楽しみたいと思ったせいだろうか。

「え……私のプライベートに興味があるの？」

姫沙は目をきらめかせて帝を見上げた。

「まあな」

「それはつまり、私に惚れているということよね？」

「それは違う」

「だって私のことが知りたくて知りたくてしょうがないんだもの。ね？」
にこにこ、いろいろな方向から帝の顔を覗き込んでくる。

「なんでもいいけどめっちゃ嬉しくちゃ嬉しそうだなお前」
 「嬉しくなんてないわ。ええ、全然。生まれて初めて北御門さんに個人的なことを聞かれて嬉しくなってなんてないわ」

鼻唄でも聞こえてきそうなくらい上機嫌だった。

——俺から個人的なことを聞かれて嬉しい……？ それってつまり、俺に惚れてるってことか!? いやいや、まさかな……南条がそんなに簡単な奴のはずがない……まさかな！
 嬉しさは伝染するの、帝も頬の筋肉が弛緩してしまふ。
 努めて表情を引き締め、真顔を保った。

「で、どうなんだ。読むのか、読まないのか、これはクラスメイトとしての雑談だ」

「そうね、結構読むわ。『アルセーヌ・ルパン』シリーズとか、『ハンニバル・レクター』シリーズとか、ゲーテの『ファウスト』とか。この前のお休みは、『古今東西・詐欺の百科事典』を徹夜で読んでしまったわ。女子力高いでしょう?」

「女子力とはいったい……」

ものすごく南条家らしいチョイスだった。

「北御門さんは、歴史書を読むのが好きみたいね」

「過去の歴史から学ぶのは、日本の未来を考えていく上で勉強になるからな。というか、どうして俺の本の好みを知ってるんだ?」

「だって、この前もトインビーの歴史書を読んでいたじゃない。ヨセフスとかを読んどるところも見かけたし」

「よく見てるな……もしかして俺に興——」

「興味はないわ」

ばっさりだった。瞬速だった。まるでそういう問いかけが来ることを予想していたかのような反応速度だった。

「じゃあなぜ俺の読書傾向を……」

「私は全人類の読書傾向を知り尽くしているからよ」

「それはすごいな!」

「ええ、そしてあなたは、六十億分の一の存在にすぎないの。あんまり自分のことを過大評価しないことね。私に恋愛ゲームを仕掛けられているからといって、あなたが特別ということは絶対にならないのだから。私があなたに対して持っている興味は、そう、道に転がっている木の葉と同じくらいと言っても過言ではないわ。いいかしら、理解できたかしら」

やたらと饒舌だった。

——え、もしかして本当に俺のことに興味があるのでは!? そういうアレでは!?
 裏を読みたくなくなってしまふ帝である。

酸素の不足を感じ、懸命に深呼吸する。たった二人で広い図書室の一角に固まっていること

を意識すると、余計に呼吸が苦しくなっていく。

そのときだった。

なんの前触れもなく、姫沙が無言で襲いかかってきたのは。

「……………ッ!？」

和やかな会話を交わしていたつもりだった帝は、不意をつかれた。

姫沙の掌底が帝のボディを破壊せんとする。

けれど磨き上げられた危機管理能力は直撃を許さず、帝はすんでのところで飛び退いた。

姫沙の手の平が図書室の内壁に叩きつけられ、ずどんと物騒な音を響かせる。

「なにを……………する……………!？」

帝は瞬時に警戒度をマックスまで引き上げ、姫沙から距離を取った。

——くそ、武器を没収したせいで油断していた……………！ クラスメイトの女子が丸腰の肉弾戦に持ち込んでくる可能性を想定しておくべきだった！

後悔に奥歯を噛み締める。

姫沙は乱れた髪を掻き上げ、ゆっくりと顔を上げた。その瞳は、捕食者の瞳。美しい唇から覗いた牙が、血を求めてざらついている。

「北御門さん……………壁ドンって、知ってる……………!？」

姫沙が低い声でささやいた。

「カベドン……………？ ハイドンの一種か……………!？」

帝の脳内にクラシックの旋律が流れ始める。

すると、姫沙は誇らしげに笑った。

「あら……………、こんな基礎的なことも知らないなんて、北御門さんは思ったよりも無知なのね。

これじゃ恋愛ゲームは私の勝利確実ね」

「そんな語彙、本当に存在するのか……………？ 俺は国語辞典は四冊ほど暗記しているが、カベドンという単語はそのどれにも載っていないかった……………」

帝はスマートフォンで検索してみたくなるが、情けない姿を宿敵に晒すことには抵抗がある。それに、全身から殺気を放っている姫沙の前で隙を見せるのは命取りだ。

「国語辞典！ 国語辞典と来ましたか！ 笑わせてくれるわね」

「なぜ笑う……………」

「国語辞典で人生のなにが分かるのかしら。国語辞典で人間の思考のなにが分かると？ 私はもっと深遠な人生の真理が描かれた文献で壁ドンを知ったのよ……………そう、少女漫画という人類の叡智の結晶でね!」

「少女漫画……………だと……………!？」

恋愛の描かれた娯楽をシャットアウトされた帝にとって、少女漫画などは触れることを許されない禁制品、聖櫃やロンギヌスの槍に劣らぬ伝説的存在。

姫沙はしたり顔で自らの博識を見せつける。

「その文献によると、壁ドンとは恋愛の最終兵器。相手を壁際に追いつめて壁を強打し、『俺のモノになれよ』とささやくことで、相手の心を完全に支配してしまふのよ」

「そんな危険なマインドコントロール術があったとは……！」

帝は脅威を覚えた。

北御門家は世論操作に長けているが、それは飽くまで大衆という集合を操るもの。異性を効果的に操る方法についての知識を、帝は持っていない。

「さあ、北御門さん。観念なさい……今日であなたの自由な人生は終焉を迎える……そう、私という支配者の奴隷になるのだから……！」

姫沙が床を蹴り、その華奢な体が宙を舞った。

凄まじい勢いで間合いを詰められ、帝の横に姫沙の拳が突き出される。

「……くっ！」

帝は瞬時に飛び退いた。

が、姫沙はすぐさま帝の回避軌道を捕捉し、さらなる追撃を加えてくる。

図書室を高速で駆ける帝、それに追いつがる姫沙。

手の平が壁を打つ音、二人の荒い呼吸音が、静寂の空間に響く。

——素早い……。このままじゃ、いつか南条にカベドンを喰らってしまふ……。

帝は焦った。

北御門の男児たるもの、南条一族にマインドコントロールを受けるなどといったことがあつてはならない。そんなことになればご先祖様に顔向けができないし、帝は腹を切って死ななければならなくなる。

「攻撃は最大の防御、か……！」

帝は姫沙の壁ドンを避けると同時、身を翻して彼女の顔面の直近に掌底を繰り出した。

文武両道の北御門男児から放たれた掌底は、その速度も風を切るほど鋭い。姫沙の美しい髪を風圧のみで何本か切り裂き、図書室の壁に絶大なエネルギーを叩き込む。

爆音と共に壁が陥没し、亀裂が走った。

けれど、姫沙の離脱もまた速い。壁ドンが直撃する寸前、転がるようにして帝の懷に潜り込み、脇をすり抜けて難を逃れる。

——この勝負、壁ドンを取った方が勝つ！！

距離を置いて睨み合う二人。

ついさっきまで平和な空間だった図書室は、いつの間にか恐るべき戦場へと変貌していた。

姫沙は細い肩を激しく上下させながら声を絞り出す。

「お、大人げないわ、ね、北御門さん……。ここは体力のない女の子に勝ちを譲るのが、紳士というものじゃないのかしら……？」

「悪いが、手加減をしていたら日本を乗っ取られるから……南条一族相手に、男子も女子もない……力の限り戦うのみだ……」

姫沙が全力で掌底を突き出す。

帝が掌底で迎え撃つ。

二人の手の平が、宙でぶつかり合った。

彼女のやわらかい肌に触れた途端、電流のような衝撃が帝の肉体に流れる。

「きゃっ!？」

「なっ!？」

二人共が、悲鳴を上げてお互いから飛び退いた。

体温の急上昇。

姫沙の顔もみるみる赤く染まっていく。

「手、手で防ぐのはやめましょ……なんか、だめだから……」

「あ、ああ、今の戦いは危険すぎたな……」

雌雄が決する前に羞恥で死亡しないよう、二人はとりあえずの戦争法を締結した。

帝はかつて弁慶を屠った牛若丸の構えを取る。

左手を突き出し、右手を掲げ、あらゆる方向からの襲撃に備える。それでいて脳の覚醒度は

究極に引き上げ、姫沙の一举一動から彼女の次の攻撃を予測する。

「……まともにやったら消耗戦ね」

姫沙が本棚の陰に駆け込んだ。

帝は姫沙を追いかけて本棚の裏に走り込むが、彼女の姿は見つからない。

「どこに逃げた!？」

急いで周囲を見回す。声はせず、足音も聞こえない。呼吸音すらない。姫沙は完全に気配を断つてしまっている。

——どこから……仕掛けてくるつもりだ……？

帝は壮絶なプレッシャーに心臓を圧迫されながら、ゆっくりと後じさった。

次の一手で勝負が決まるとの予感。

前方には、大きな本棚が仁王立ちしている。

左から来るか、右から来るかと、帝は思考を走らせる。

だが、その刹那——姫沙が本棚の『上』から、天翔る青龍のように飛び降りた。

「……………!？」

予想外すぎる出現に、帝の体が凍りつく。

産み出された致命的な隙を逃さず、姫沙が床を蹴って帝に突撃する。

彼女の両手が、帝の両脇の壁に叩きつけられた。左右を塞がれては、帝は飛び退くこともできない。かといって、小柄な少女を突き飛ばして逃げることもできない。

「チェックメイト、ね……。私のモノにならなさい！」

決して逃亡を許さないとばかりに、姫沙は帝に全力でしがみついた。

ぜーはーと息を荒らげ、顔を真っ赤にして帝を見上げている。

やわらかい体が帝に押しつけられ、丸い膨らみを通して激しい鼓動が伝わってくる。

帝の鼻腔に流れ込む、甘い花の香り。

床に踏ん張っているせいで、姫沙の細い足はふるふると震えている。

どんなに相手が宿敵の一族とはいえ、可憐な容姿の姫沙からそんなことをされれば、破壊力は天地災害級で。

——逃げられねえ！ 別の意味で！

帝は理性の限界を感じた。

だが、余裕がなくなっているのが察知されたら一巻の終わりだ。

帝は精神力を集中させて表情を引き締める。もはや顔面の筋肉を維持するためだけに帝の全カロリーが消費されている。それは、狸だらけの政界を泳ぐ北御門家ならではの、驚異の奥

義——鉄^{キョウリョウザイセ}飯^{イハン}面である。

「ど、どうかしら？ 私のこと好きになった？ 惚れたでしょ？ 頭撫^なで撫でとか、したいでしょ？」

姫沙は必死に訊いてくる。密着しているのが恥ずかしいのか、ほったたを林檎のように染め、



大きな瞳を潤ませての詰問である。

——抱き締めてえ!!

帝は自らの内なる衝動に死に物狂いで抗った。

そもそも、好きになるものにも。

実のところ北御門帝は……とうの昔から南条姫沙に惚れてしまっていた。

恋愛ゲームなんてもんを持ちかけられる以前から、彼女を目で追っていた。

しかし、北御門一族の男児が南条の娘に恋をするなど、許されることではない。

宿敵に好意を抱くのはあつてはならない大失態だし、掟で恋愛は禁止されているし、許嫁だつて決められている。

だから、帝は自分の恋心を墓場まで持つていくつもりだったのだ。

だというのに、姫沙は恋愛ゲームを提案してきた。

お互いの人生と一族の行く末と日本の未来をベットし、勝者が敗者のすべてを手に入れる、究極の恋愛ゲームを。

女子高生の顔をした運命の女神によって賽は投げられ、後戻りはできない。

帝にできるのは、恋心を隠しつつ、姫沙を惚れ込ませて奴隷にすることだけだ。

「ふん……そのくらいで惚れるわけがないだろう。カベドンというのかもしれないマインドコントロール技術ではないんだな」

大嘘だった。

姫沙にぎゅーとしがみつかれ、帝の精神的鎧はズタボロの紙切れと化していた。

「い、いいから、惚れなさいよ! この馬鹿! 私のこと好きになつてよ!」

姫沙は破れかぶれといった様子で、帝の胸に頭を何度もぶつけてくる。

「は、はは……なにをしても無駄だ……このくらいの攻撃で、俺が揺らぐわけない……」
大嘘だった。

叡智の詰まった姫沙の小さな頭が胸板にばすばす当たる度、その髪から甘酸っぱい香りか漂う度、帝の防御は恐るべき勢いで削られていく。

——押し倒してえ!!

抱き締めたいから欲望がクラスアップしていた。

図書室という密室で、同い年の男女が二人きり。

恋愛ゲームのルール上、押し倒しても姫沙は文句を言わないだろう。

だが、それは帝が明確に姫沙を求めたことになる。ゲームは終了、帝は敗北、姫沙の甘い腕に抱かれながら、北御門家と日本は暗黒に包まれてしまう。

そんな未来も幸せかも……と感じる帝だが、即座に愚かな考えを振り払う。手に入れるなら総取りだ。最高の女も最高の未来もすべて自分のものにしてこそ、北御門の男児だ。

「……悪いが、攻撃に転じさせてもらおう!」

「えっ……」

帝は姫沙の手首を掴むと、二人の位置関係を裏返すようにして姫沙の背中を壁に押しつけた。自分の手を壁に叩きつけ、姫沙に顔を寄せてささやく。

「姫沙……無駄な抵抗はやめて、俺のモノになれよ」

「……………」

姫沙が体をこわばらせた。

突然の名前呼びによる、衝撃度増幅作戦である。自分もカベドンにはかなりのダメージを受けたのだから、少しは姫沙に影響を与えられるかと期待した帝だが。

「ふ、ふん……その程度の台詞（せりふ）では、私はなにも感じないわ……できるものなら、もっと私のハートを撃ち抜くような言葉をささやいてみなさい」

などと言いつつ、姫沙の耳は真紅に染まっていた。

必死に帝と視線を合わせないよう目をそらしつつ、きゅつと唇を噛んでいる。

——これは……、いけるか!? 押しまくればゲームが有利になる!

「そうか? その割に、顔が真っ赤になっているみたいだが? 実はドキドキしているんじゃないのか?」

「そ、そんなことにはいいわっ!」

噛んでしまい、さらに顔を真っ赤にする姫沙。

しかしそれは、帝にも絶大なダメージを与えた。

—— 噛んだ! あの傲岸不遜（ごうがんふそん）で完璧超人の南条が! 俺の腕の中で『にやいわ』とか言っ

て恥ずかしがっている……!

理性が溶かされていく音が、はつきりと脳裏に響く。

精神の危険を感じ、帝はとっさに姫沙から飛び退いた。

ぺたんと床に崩れ込む姫沙、あまりの損傷で床に膝（ひざ）を突く帝。

二人して息を切らし、頬は火照りきっている。

「こ、このままじゃ、下校時刻までに作業が終わらないわ……」

「な、なんだ……休戦したいのか……?」

「仕方ないわ……今日のゲームはこれくらいにしておきましょう……」

「まあ……、仕事が進まなかったら本末転倒だからな……」

期せずして、二人のあいだに停戦協定が結ばれる。

姫沙の残り精神力は不明だが、少なくとも帝は死亡寸前だったので、ゲームを逃れることができて救われた思いだった。

二人は今度こそ普通に本の整理を進めていく。

徐々に体の熱も冷めてきて、帝は落ち着いて思考を働かせられるようになった。

情報摂取の手段として書物を評価していることもあり、図書委員の仕事は楽しい。中学時代は家業の訓練として生徒会に入っていたが、北御門家の人間に生徒会の仕事は一片の失敗も許されなかったから、家業と関係のない図書委員の役は気楽だった。

「ねえ……」

本を棚に押し込もうとしていた姫沙が、ふとつぶやくように言った。

「……なんだ？」

恋愛ゲームが停戦中だから、帝も気兼ねなく返せる。

「……私と同じ委員会の仕事するのって、そんなに嫌？」

「え……？」

姫沙は本の背表紙を見つめたまま、決して帝と視線を合わせようとせず話す。

「私は……北御門さんと一緒に係やるの……、嫌じゃないけど」

「俺は……」

帝は言葉に詰まった。

伝えたいことはたくさんある。ぶつきたい想いは溢れそうなほどある。

だが、北御門が南条にそれを告げるのは、天地が逆転でもしない限りは不可能で。

「……嫌では、ない。お前と話すのは嫌いじゃない。その……クラスメイトとして、って意味だけど、変な意味じゃなく」

「わ、私だってクラスメイトとしての意味よ！ 当然じゃない！」

きつと睨んでくる姫沙と、視線が絡み合った。

上気した頬が美しいと意識する暇もなく、姫沙はすぐにそっぽを向く。再び棚の上の方に本を押し込もうと背伸びし始めるが、なかなか上手くいかない。

そうやって苦労している姿は本当に女の子らしく、そして弱々しい。強大な闇の支配者である南条家の面影は片鱗もなく、そこにいるのは一人のクラスメイトだ。

帝は無言で姫沙の手から本を取り、きちんと棚にしまい込んだ。

「あ」

姫沙は驚きの声を漏らす、なにも言わずにうつむいて作業を続ける。

そのなめらかな肌は、首筋から耳まで赤く染まっただけ。

速まる鼓動を静められないまま、帝は共に仕事を続けた。

『下校の時間です。学校に残っている生徒は、すみやかに帰宅してください』

校内放送が流れ始め、帝と姫沙ははっと顔を上げた。

窓に映る空はとつと、橙に染まり、徐々に闇へと吞まれていつている。

「もうこんな時間か!!」

「気づかなかったわ！」

よほど作業に集中していたのかといえ、そういうわけではなく、姫沙の一举一動に集中している間に時が過ぎてしまっていた。

二人は急いで本の整理を切り上げる。

荷物をまとめ、図書室から出……ようとしたところで、びくりと足を止めた。

廊下側の窓の外、少し離れたところに、瓦屋木影の姿を見たのである。ご丁寧に椅子まで持ち出して廊下の真ん中に居座り、いつものカメラを構えている。

帝と姫沙は入り口の扉に張りつくようにしてささやき交わす。

「あいつ……俺たちのゲームに勘付いてるのか……？ スクープを押さえようって腹か？」

「いいえ、多分違うわ。あれを見て」

姫沙は木影が床に置いている袋を指差した。

「袋……？ やけにでかいな」

サンタクロースが好みそうなサイズだ。

「恐らく、私たちが図書室で埋蔵金を見つけるんじゃないかと期待しているのよ。その情報をネタに、口止め料をもらうつもりね……」

「どんだけぼったくる気だよ！ てかまだあの話信じてるのか!?」

「乙女は論理よりも直感を信じるところがあるからね……私は自分の頭脳しか信じないけど」

「お前はさうだろうな」

帝は南条姫沙に普通の女の子らしい成分がふんだんに含まれているとは思っていない。木の根っこから生まれたと言われても違和感がないほどだ。

姫沙は親指の爪を噛む。

「困ったわね……変に絡まれてゲームの邪魔をされたら大変だし、南条家の工作員たちに連絡して麻醉ガスを撃ち込ませるしか……」

「そこまでするなよ！ クラスメイトは武装勢力じゃねえ！」

「じゃあ、自分で始末をつけましょう。この麻醉銃で……」

「まだ武器を隠し持ってた!? クラスメイトに実力行使するなって言ってるんだ！」

服の中から姫沙が取り出した銃を、帝はすぐさま奪い取った。

ほのかに温かい。姫沙の生肌の体温を感じ、帝はダメージを受ける。

姫沙は帝を睨みつけた。

「だったら、どうしたらいいの!? 他に案がないなら黙っててくれないかしら！」

「そんなの簡単だろ。ほら、来いよ」

「えっ……」

戸惑う姫沙の手首を掴み、帝は図書室から飛び出した。

「あーっ！ やっと出てきた！ 姫沙ちゃん、帝くん、埋蔵金は——」

椅子から跳び上がる木影。

「どうするの!？」

「逃げるだけに決まってるだろ！」

帝は姫沙の手を引つ張り、木影とは反対方向に疾走した。手を握るのは恥ずかしいから、袖の上から軽く握る程度のリード。だが、姫沙はちゃんと走ってついてきてくれる。

二人の足音が階段に響き、吐息が宙に弾む。

帝と姫沙は全速力で校舎を脱出する。

運動部員たちだらけの外庭を駆け抜け、裏門から駆け出す。

人気のない裏通りを、二人は走った。

既に帝は手を離しているが、姫沙は帝に遅れまいと急ぐ。

少女の髪が夕日に照らされて踊り、スカートの裾が軽やかに跳ねる。

「ま、待って、北御門さんっ……あんまりスピード出さないでっ……」

「あ、悪い。でも、あと少しだから！」

帝は姫沙の鞆を代わりに持ち、速度も若干緩めた。いったいなが入っているのか、その鞆はやたらと重い。けれど詰問する余裕もなく、二人でひたすら夕暮れを駆ける。

——なんか、これ……楽しいな。

姫沙と一緒に逃げながら、帝は思った。

二人で悪だくみをしているような感じがして、無性に胸が躍る。

相手は宿敵の一族であり、人生を賭けたゲームの対戦者でもあるのに、今はそんなことはどうでもよくなる。

しばらくすると、帝たちは学校から離れ、川沿いの道へとたどり着いた。

川沿いには土手を挟んで小さな車道が続き、向こう岸に電車が走っている。電車には通勤中のサラリーマンがたくさん乗っていて、彼らの姿が落日に影絵を作っていた。

「この辺りまで来れば、大丈夫か……木影もついてきてないみたいだし」

帝は足を止めて振り返った。

周囲には他の人間もおらず、電車の走行音と川の水音だけが静かに響いている。

「はあ……はあ……」

姫沙は膝に手を突くようにして息を切らした。

華麗な髪筋は千々に乱れ、制服のリボンが首の後ろまで跳ね上がっている。額を垂れてきりりと光る汗が、まるで水浴びを済ませた女神のように美しい。

「も、もう……私に肉体労働をさせないでよね……こういうの、慣れてないんだから……」

「南条家は頭脳労働が専門か？ たまには体を動かさないと、頭も鈍るぞ？」

「鈍らないわよ、それくらいじゃ。私の頭は日本一なんだから」

姫沙は不服そうに口を尖らせてつつ、帝から鞆を受け取った。

「運転手に電話しないと……。あいつら、まだ校門で待ってるぞ」

「私は今日は電車だから大丈夫だけど……。一緒にいるところは見られない方がいいわよね」

「あ、ああ……。この辺で、解散するか」

帝は名残惜しい感じがしたが、北御門家の運転手に姫沙が会えば面倒なことになる。

両親は恋愛ゲームのことを把握していないし、北御門の息子が南条の娘と長い時間を過ごしているなどと知れば、大騒ぎするだろう。

姫沙が学生鞆をぎゅっと胸に抱き締めた。

「今日は引き分けたけど……。明日からも、手加減しないから」

「お、おう……。こっちこそ」

楽しいだけの時間はここまで。

お互いを賭けたゲームの再開。

「……。じゃあね。明日も楽しみにしてるわ」

「……。じゃあな。お前には絶対に負けない」

二人は背を向け合い、別々の方角へと歩き出した。

帝と別れるとすぐ、姫沙は近くの街路樹へと突っ走った。

木陰にうずくまり、胸を押さえる。

——し、心臓、止まるかと思っただわ……。

逃げるために走ったせいではない。

その前からずっと、二人で図書室に入ったときから、緊張して緊張して仕方なかったのだ。

火照りまくったほつたを、両手ではんと叩いて冷ます。だけど、手も熱くなっているものだからどうしようもない。

「二人つきりって、あそこまで危険なのね……」

貞操が、というより、姫沙の心臓が。

帝と一緒にいるだけで顔がとろけてしまいそうで、クールな態度を保つのが大変すぎた。

「大丈夫？ 具合でも悪いの？」

通行人の女性が、しゃがんでいる姫沙を心配して声をかけてくる。

「ぐ、具合は悪くないわ！ ちょっと病気なだけ！」

姫沙は慌てて立ち上がり、その場から歩み去った。

風を切って早足で歩き、少しでも体の熱を冷まそうとする。

こっちから仕掛けた恋愛ゲームだというのに、たくさん策略を練ってから戦っているというのに、姫沙は帝に翻弄されっぱなしだった。